



木原ふれあいどんど

書初めを先端に

薪をとんど中心に置く

ワラ束作り

思いを込めた書初めや飾りが天高く舞い上がりました。つきたてのお餅は大変おいしかったですね。

餅つき

小さなとんど入場

餅焼き

三原市民ビーチボール大会

糸崎・木原地区は6チーム出場しましたが、残念ながら入賞はなりませんでした。皆さんお疲れさまでした。

人生を決めた出会い

木彫一筋 平櫛田中（中編）

ひろぐし でんちゅう

明治三十年（一八九七）、彫刻家を目指して上京した二十五歳の倅太郎（平櫛田中）は翌年、彫刻家の第一人者・高村光雲を訪ねました。光雲は当時、東京美術学校の教授として、岡倉天心校長のもとで日本伝統の木彫芸術を守りながら、西洋美術の長所や技法を取り入れようと苦心していました。

彫刻美術といえば、当時は西洋流の塑像（粘土などの材料で造った像）が中心で、手間のかかる木彫は人気がなく、美術展に出品しても売れないので衰退する一方でした。そうした中、光雲の弟子たちと作品作りで没頭する倅太郎は、次第に迷いを感じ、ある日、近くの禅寺で西山禾山和尚の説法に耳を傾けました。

「禅とは特別なことをするのではなく、朝起きて顔を洗い、掃除をし、食事をし、挨拶をするという日常の一つ一つの行いに、心を整えて向う、つまり与えられた仕事を一生懸命にすること。価値ある仕事は速成できないのだから、日ごろ怠けず、他に頼らず、いつ死んでもよいよう、一瞬一瞬を大事に生きるという心なのだよ」

心の曇りが晴れている倅太郎。禅の教えと和尚の人柄にひかれ、以後三年、寺に通い続けます。心を澄ましてノミを取れば、自分のやるべきことが見えてくるのです。

倅太郎の人生を決めたもう一つの出来事は、天心との出会いです。あるとき、光雲の声かけで、倅太郎は仲間と共に天心を訪ねました。そのころ天心は、東京美術学校を離れて日本美術院を創立し、日本の伝統を生かした革新運動を進めていました。

（つづく）

（ニューモラル五三三号より）